



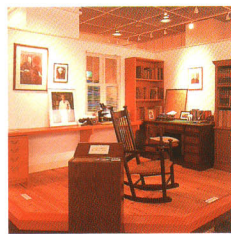
吉田富三記念館

京区の墓の隣には研究を支えてくれた感謝を込めて、愛らしい「シロネズミの碑」が建っている。愛情豊かな彼の精神を見習うため、ここ浅川の吉田富三記念館の前にも、碑を模した同じ「シロネズミの碑」が建てられている。

### 交流、そして人づくりの場

富三の偉大な業績とその生き方を学ぶため、浅川町では「ふるさと創生事業」の一環として平成五年から顕彰事業に取り組んでいる。日本癌学会と共同して癌研究の功労者に贈る『吉田富三賞』や、福島県内の小学校で科学教育の振興を図るための『吉田富三・子ども科学賞』の制定。その中核施設となっている『吉田富三記念館』の開設がそれである。

平成五年に開館した吉田富三記念館には、彼の研究内容からプライベートに至る充実した資料を展示。来館者は日本を代表する医学者や文化人をはじめ、全国から年間約四千人が訪れている。交流の拠点にもなっている記念館には、次の三つの役割がある。富三の偉業の顕彰・文化センターとしての地域の人間教育・青少年の教育拠点。それに基づいて、すでに小中高生の見学学習や、教員を対象とする総合学習などにも利用されているほか、館内には『吉田富三賞』や『吉田富三・子ども科学賞』の受賞者のパネルも掲げられている。平成一一年度には研修室も増築。さっそく「名医と語ろう健康教室」をテーマに講演が行われ、県内から約一〇〇人が集まった。平成一二年度からは、小学生を対象とする「子ども科学教室」も開講される。顕微鏡で自然界の不思議を観察していかうとするその取り組みは、子どもたちの輝く瞳にその先の未来をのぞかせようとしているのかもしれない。



吉田富三記念館展示内容  
 研究室の再現 (右上)  
 吉田肉腫とは (左上)  
 プライベートライフ (中央)  
 吉田博士の生涯 (右下)



絵画が好きだったという富三のスケッチブックには妻や子どもの肖像や自画像がぎっしりと描きこまれている。写真だけでは記録として十分ではないと考えていた富三は、「主観的な写生も、車の両輪として必要だ」と言っていたという。おびただしい癌細胞の写生を残したのも、そのためだった。